修士論文
2010 年 1 月

複数国に滞在した帰国生の特性
－５人のインタビューから－

指導　佐々木倫子　教授

国際学研究科
言語教育専攻
208J4009
田中美也子

目　次

はじめに
第１章　研究の背景と理論 …… 1
1.1　帰国子女教育の推移（1950-1990）
1.2　「転々組」の定義
1.3　テーマ設定の根拠

第２章　調査の概要 ……11
2.1　調査協力者
2.2　インタビューの項目

第３章　調査結果と分析 ……14
3.1　帰国時の環境への適応
3.2　滞在地に対する考え
3.3　日本‘並びに‘日本人‘に対する考え
3.4　海外体験に対する評価
3.5　親に対する考え
3.6　本を読むことについての考え
3.7　日本語力をどう考えるか

第４章　考察 ……22
4.1　一般の帰国子女の特性との比較
4.3　インタビューに見られる特性

第５章　結論と今後の課題 ……25
5.1　結論
5.2　今後の課題

参考文献

修士論文（要旨）

帰国子女の中には、複数国に滞在した者がいる。稿者は、それらの帰国生を名付けて「転々組」と呼ぶ。帰国子女教育の歴史は、1950 年代に始まる。その間、1970 年代までは、帰国子女というと、欧米系の帰国生を指していうことが多かった。ということは、欧米系の帰国生の特色をもって一般の帰国生の特色と見られていたからであった。そのことは現在でも修正されているわけではない。稿者は、1979 年に帰国子女教育学級を開設した附属Ｏ中で 25 年間を教えた経験から、それらの欧米系の帰国生とは異なる生徒が少数ではあるがいることに気がついた。欧米系の帰国生の特色と押し並べて言われる特色とは違う面があるのではないかと思いいたった。これらの生徒は、複数国の海外経験者であった。そこでこれらの生徒の特色を調べてみようと思った。したがって、研究テーマ設定の根拠は、稿者自身の教職経験と帰国子女の特性を述べた文献である。しかし、「転々組」を対象とした先行文献は、管見するところ皆無であった。そこで、まず、それらの経歴をもった帰国生を「転々組」と名付け、元教え子 5 人（20 代～40 代）を協力者としてインタビューすることにした。協力者の滞在歴から「転々組」定義を定めからインタビューに入った。インタビュー項目は、7 項目である。１.「帰国時の環境への適応はどうであったか」２.「滞在地に対する考え」３.「日本ならびに日本人に対する考え」4.「海外体験に対する評価」5.「親に対する考え」6.「本を読むことについての考え」７.「日本語力について」以上である。考察としては、一に、先の文献で、一般の帰国生との比較、二に、インタビューの内容を分析して導くことにした。結論は、「転々組」の特性として、まず、欧米系より自己肯定観が低いということである。そのことは、表立って自己主張をしないということに表れてくる。そして、多様な価値観を肯定する態度、複眼的思考の二つの特性が突出して取り上げられる。その他、日本語力について不安をもっているのではないかなどという点も考えられないことではないが、今回の論文では、調査不足で推測の域をでない。

最近の顕著な動向として、アジア系の帰国生の問題が取り上げられ、稿者も興味をもっているが、ともあれ、稿者の帰国子女教育は、本論文でやっと長い間の宿題を果たした思いである。

参考文献

書　籍

木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い』弘文堂

戈木クレイグヒル滋子（2006）『グラウンデッド・セオリー・アプローチ―理論を生み出すまで』新曜社

木下康仁（2006）『分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂

佐藤郡衛編著（1995）『転換期にたつ帰国子女教育』多賀出版

佐藤郡衛（1997）『海外・帰国子女教育の再構築―異文化間教育学の視点から』玉川大学出版部

佐藤淑子（2001）『イギリスのいい子日本のいい子―自己主張とがまんの教育学』中公新書

恒吉遼子（1992）『人間形成の日米比較―かくれたカリキュラム』中公新書

中島和子（1998）『バイリンガル教育の方法―12 歳までに親と教師ができること』アルク

馬淵仁（2002）『「異文化理解」のディスコース―文化本質主義の落し穴』京都大学学術出版会

箕浦康子（1984）『子供の異文化体験―人格形成過程の心理人類学的研究』新思索社

論　文

小島勝（1996）「書評『転換期にたつ帰国子女教育』」『異文化間教育』第 10 号

論文集

佐藤郡衛（2005）「海外子女教育にみる『日本人性』の問題とその再考―トランスナショナルな海外子女教育の可能性―」佐藤郡衛・古谷武志編『ひとを分けるものつなぐもの―異文化間教育からの挑戦』ナカニシヤ出版